

## エルヴェシウスに対するルソーおよびディドロの 哲学・教育論争について

—フランス啓蒙思想における認識・道徳・能力の諸問題—  
(その5)

永 治 日 出 雄  
Hideo NAGAYA

(教育学教室)

### I エルヴェシウスに対するルソーの批判

(研究報告第25輯, 1976年3月)

### II ルソーに対するエルヴェシウスの批判

(研究報告第26輯, 1977年3月)

### III エルヴェシウスに対するディドロの批判(上)

1. エルヴェシウスとディドロの関係 その1 — 従来の評価について
2. エルヴェシウスとディドロの関係 その2 — 『精神論』等の執筆をめぐって
3. 『《精神論》への考察』におけるエルヴェシウス批判

(研究報告第27輯, 1978年3月)

### IV エルヴェシウスに対するディドロの批判(中)

1. エルヴェシウス著『人間論』の刊行とディドロによる『人間論』の検討
2. 『《人間論》への反駁』の版本と草稿
3. 『文芸通信』に連載された『《人間論》への反駁』
4. 『文芸通信』の性格とディドロの役割
5. 『文芸通信』無署名論評におけるエルヴェシウスおよび『人間論』

(研究報告第31輯, 1982年3月)

### V エルヴェシウスに対するディドロの批判(下の一)

1. エルヴェシウス著『人間論』とディドロ著『《人間論》への反駁』の全体的な構成および力点

エルヴェシウス著『人間論——人間の知的能力と教育』(以下は『人間論』と略称する)は最初の版で上巻637頁, 下巻760頁にわたり, ディドロ著『エルヴェシウスの《人間論》への体系的反駁』(以下は『《人間論》への反駁』と略称する)もルヴァンテール編『全集』では189頁に及ぶ長編である。そして, ディドロ晩年の思索を把握するために, 多くの研

究者は後者を重要な作品と評価する。しかし、『《人間論》への反駁』を叙述の順序にしたがって、綿密に検討した論文はあまり見当たらない。フロアングルによる『ディドロとエルヴェシウス』、クライトンによる『ディドロとエルヴェシウスにおける人間と精神』、野田又夫による『エルヴェシウスとその周辺』などの論稿は、独自の視点を有するものの概観的な考察に止まるといえよう。<sup>1)</sup>この問題をより深く究明した業績として、ベッスの論文『エルヴェシウスへの反駁の考察』が挙げられる。エディション・ソシアル版『精神論(抜粋)』の編者でもあるベッスは、エルヴェシウスとディドロの主張の相違を、フランス唯物論の基本的な矛盾に根ざすと説明する。<sup>2)</sup>ただし彼の論文では自然と文化、個人と社会というふたつの論題に焦点が絞られ、ディドロのエルヴェシウス批判を、全般的に検討するまでには至らない。

したがって筆者は『人間論』および『《人間論》への反駁』の全体的な構成をまず確認し、これらの著書を逐条的に解明していこう。もとよりディドロの論述のなかには、個々の段落への論評とともに、『人間論』への総括的な評価や自己の信念の開陳が混合する。しかし、本稿の主要な課題は、『《人間論》への反駁』を、エルヴェシウスの著作と対比しつつ検討することにある。

そもそも人物Aと人物Bとの間に批判や論争が生じた場合に、Aの言説のみを傾聴し、Bの主張を顧みないのは、片手落ちとしかいえない。だが、Aを批判するBがより著名で権威を有する際には、理性にも良識にも反する不公平が、しばしば行なわれる。綿密で視野の広いコンペイレの名著『フランスにおける教育理論の批判的歴史』も、エルヴェシウスに関する項目では、ほとんどディドロの論評に依存している<sup>3)</sup>。批判者である人物Bだけに追従することは、彼の思想の普及や教条化には役立っても、科学的な態度とは思えない。Bに対するAの批判ははたして正当か。こうした懐疑的精神を筆者は今後も保持したい。

本稿では最初に『人間論』と『《人間論》への反駁』について、全体的な連関を検討しよう。ディドロはほとんどの章節において、まずエルヴェシウスの文章を引用し、ついで自己の論評を長短さまざまに展開する。これらの論評は該当する個所を批判するだけでなく、しばしば『人間論』全体の原理にも及び、みずからの所信の披瀝にまで拡がる。しかし、『人間論』からの引用の頻度を章毎に数えれば、どの部分にディドロの論評が集中したかを知る目安にはなろう。

表Cはふたつの著作の構成と力点を対比したものである。この表を作成するにあたり、筆者は、『人間論』の各章の長さを1773年の最初の版(スミスの分類では『人間論』No.1)で測り<sup>4)</sup>、『《人間論》への反駁』の各章の頁数は、ルヴァンテール編『全集』第11巻により算出する<sup>5)</sup>。『人間論』のなかでディドロの論評を浴びた論述は、『《人間論》への反駁』に引用され明記された個所だけを教えた。

なお、『《人間論》への反駁』に関して、現在のところ最良の版本であるルヴァンテール編『ディドロ全集』では、『人間論』序論第一節・第二節・第三節への論評が、同書第一章第一節・第二節への論評と誤認され、後者の一部として混入した。この初歩的な混乱は、十九世紀のアセザ編『全集』から踏襲され、ディドロの作品を『人間論』と照合することが、いかにすくないかを感じさせる<sup>6)</sup>。

すでに『精神論』においてエルヴェシウスは、人間精神の源泉は感性と経験であり、各人の能力は環境と教育により形成されると主張した。『人間論』の前半も、こうした感覚

表C 『人間論』各章に対するディドロの論評の分布

エルヴェシウス著 『人間論』			ディドロ著 『《人間論》への反駁』	
構成	各章の主要な論題	各章の長さ	『人間論』各章 への論評の長さ	論評された『人間 論』の該当個所
まえがき	『人間論』執筆の意 図	10 頁	2 頁	2 カ所
序 説	人間の科学および教 育の科学を構築する 構想	20 頁 (4 節)	3 頁	11 カ所
第 一 章	能力や性格の相違は 環境と教育により形 成される	148 頁 (15 節)	17 頁	34 カ所
第 二 章	正常な人間はみな平 等な精神的素質をも つ	274 頁 (24 節)	76 頁	98 カ所
第 三 章	精神の優劣を生む諸 原因	22 頁 (4 節)	12 頁	16 カ所
第 四 章	精神の優劣は情念の 強弱に、情念の強弱 は環境の如何に依存 する	195 頁 (24 節)	29 頁	46 カ所
第 五 章	精神の優劣を感官の 精粗に帰する誤り(ル ソーへの批判)	108 頁 (11 節)	11 頁	24 カ所
第 六 章	無知から経済的不平 等が生ずる	104 頁 (18 節)	10 頁	17 カ所
第 七 章	国民の福祉はすぐれ た立法により実現さ れる	80 頁 (12 節)	5 頁	13 カ所
第 八 章	国民の福祉を構成す る要件	123 頁 (26 節)	16 頁	27 カ所
第 九 章	政治と法律を改革す る構想	195 頁 (31 節)	9 頁	22 カ所
第 十 章	教育改革の構想と教 育の科学の構築	92 頁 (11 節)	6 頁	10 カ所
補 論	自己の理論の特色	36 頁 (4 節)	2 頁	6 カ所

主義や教育決定論の開陳と敷衍である。なかでも第二章は基礎理論ともいべき認識論と能力論を取扱い、最大の頁数があてられた。だが、こうした第二章も『人間論』の全体からすれば、二割の長さを占めるにすぎない。

ディドロの著作では『人間論』第二章への批判は全体の四割を占める。第一章と第四章への論評も多く、ディドロの主要な関心は、前半の主題である感覚主義や教育決定論に注がれたといえよう。第六篇から始まる後半への論評が、『《人間論》への反駁』において手薄である事実は否定できない。

しかし、サン・ランベールの伝記が伝えるとおり、『人間論』でエルヴェシウスが力点を置いたのは、『精神論』の原理を繰返すことではなく、新しい展望と構想を提起することであった。<sup>7)</sup>『人間論』の第六章と第七章では国民の生活や経済の問題が考察され、第八章で政治と法律の改革が、第十章では教育の改革と教育の科学の構築が提案される。こうした改革の構想を含む後半にこそ、『人間論』の真価と独自性が存する、と筆者は考える。

こうして『人間論』と『《人間論》への反駁』を対比すると、双方の力点の異なることが明らかとなる。もとより人物Aの作品を人物Bが批判する場合に、全巻を万遍なく論評する仕方は、かならずしも必要でない。だが、批判の対象が若干の章節に限定され、しかも全体の重点が他の章節にある場合、Aの著作についてBによる論評だけで判断することは、きわめて危険と感じられる。ディドロの権威ディークマンは、『《人間論》への反駁』を素晴らしい対話と評したが<sup>8)</sup>対話の醍醐味を知るためにも、語り続ける双方の言説を、十分に傾聴することが望ましい。

## 2. 『人間論』まえがきへのディドロの批判

『《人間論》への反駁』は長大な作品であり、そのすべての箇所について論述することはできない。とはいえ、本稿では注目すべき論評を可能なかぎり追跡し、『人間論』の叙述と照合しつつ、逐条的にディドロの批判を検討しよう。

ディドロがハーグで最初に手にしたのは、『人間論』初版と推察され、そこには刊行者によるカザリン二世への献辞と10頁にわたるまえがきが見出される。まえがきにおいてエルヴェシウスは執筆の意図と晩年の心境を述べ、これに対してディドロは二箇所論評を記した。

### <資料1>

#### 『人間論』まえがき

人間および真理への愛が、私にこの作品を執筆させた。自己を知り、道徳について明確な観念を身につければ、人間は幸福で有徳になるであろう。

筆者の意図は怪しげなものではない。この書物を生きている間に刊行すれば、私は迫害に晒され、新たな地位も財産も得ることはできない。<sup>9)</sup>

(『《人間論》への反駁』に引用された個所に、筆者が下線を付した。以下おなじ)

#### 『《人間論》への反駁』まえがき

こうした真情の吐露が、著者の展開する原理に背反することを、順々に読者はみていくであろう。彼の原理が本当であれば、危険を冒してまで、なぜ書物を刊行するのか。<sup>10)</sup>

ここには簡単ではあるが、『《人間論》への反駁』を貫く観点のひとつが示される。デイドロは『人間論』の誤謬を立証するため、エルヴェシウス自身における思想と行動の背離を指摘する。人間のあらゆる活動の原理は快楽と利益の追求にあると主張しつつ、なぜ彼は弾圧を受け、官職を失っても文筆活動を続けるのか。エルヴェシウスの行動への称讃と彼の理論への椰諭は、第2章第11節への論評でより入念に綴られる。この箇所はデイドロの批判の特徴を端的に表わし、エルヴェシウスの生活を語る貴重な記録でもある。まえがきへの論評と併せて検討してみよう。

<資料2>

『人間論』第二章第十節

飢えと苦痛は貧しい人々、すなわち大半の人々を動かす活動の原理である。そして快楽は貧窮を知らぬ人々、すなわち富裕な人々を動かす活動の原理である。ところであらゆる快楽のなかで、もっとも強烈な刺激をもたらし、もっとも熱烈な活力を魂に生ずるのは、女性との快楽にはかならぬ。自然はこの快楽を享受することに、最高の陶酔を結びつけ、私たちの活動を導く強大な原理のひとつにした。(原註)

(原註)

みずから世間を離れ、隠遁閑居する学者もある、と私は反論を受ける。こうした場合に学問への愛の根源が、肉体的快楽への愛やとりわけ性への愛に存すると、どうして言えるか。ふたつの氷炭相容れぬ事柄を、どうして融合できるか。こうした反論に応えるため、学者を守銭奴に喩えてみよう。守銭奴がいま入用なものさえ儉約するのは、いつの日にか贅沢を味わおうと望むからである。守銭奴が美しい城を欲しがり、学者が麗しい女性に憧れたとする。これらを手に入れるには、莫大な富や高い名声が必要であり、守銭奴は財貨の蓄積に、学者は声価の高揚に努める。だが、富や名声を獲得するまでに幾多の歳月が費やされて、守銭奴も学者も年をとる。儉約や隠遁の習性も身に染まり、最後まで抜けない。こうして美しい城を構えることも、恋人と結ばれることもなしに、守銭奴も学者も死んでいく<sup>1)</sup>

『《人間論》への反駁』第二章第十節

これらはけっして融合しない。君は解きえない問題に頭を悩ます。解答は出されたが、的はずれに思われる。いくら考えても無駄であろう。

健全な精神を納得させない牽強付会はすべて放棄してほしい。考えてみたまえ。二十歳で書齋に閉じ籠り、三十年間を部屋着だけで過ごしたライプニッツは、幾何学の深淵に沈んだり、形而上学の暗闇のなかをさ迷ったまま、まるで臨終の病人のように、地位を得ることも、女性と横になることも、古い長持に金貨を詰めることも、念頭においていない。(中略) エルヴェシウス夫人と楽しむことと引き換えに、君は『精神論』やいま検討している『人間論』を火中に投ずるであろうか。君は生まれつき色好みに見える。だが、自分の遺作が出版された半年後に、もしもまだ君が生きていたら、敢えて夫婦の幸福すら危険に晒したであろう。(中略)

富も感覚的快楽も求めることなく、エルヴェシウスは最初の著作を執筆し刊行した。エルヴェシウスの受けた迫害はよく知られている。激しく果てしない嵐のなかで彼は叫んだ。「このうえ一行でも書くよりは、死んだほうがよい。」(中略)

ふたたび富も名誉も感覚的快楽を求めることなく、これらを容易に獲得する方法があるのに、エルヴェシウスは第二の作品を書き、またも危険な屋稜に昇る。もういち

ど転落すれば、はるかに大きな打撃を蒙るであろう。「汝みずからを省察せよ。」他人を詮索するのはよいが、自身に関して無知では困る。死後にしか公にできない作品を、どんな目的で君は書くのか。多くの無名の文筆家はなにを目的とするか。危険を伴う行動を敢行するとき、そうした人間の熱情はどこから生まれるか。僧侶や国王に対して、勇敢に抗議する多くの哲学者たち、我々の同時代人や友人について君はどう考えるか。彼らは自己を名乗ることもできず、榮譽も利益も享樂も望んではいない。<sup>12)</sup>

人間の行動の源泉を追求するエルヴェシウスと、さまざまな行動の独自性を強調するディドロとの間に、筆者はやはり力点の相違を感じず。とはいえ、両者の意図と論理は明確であり、『人間論』まえがきへの批判を理解するのに役立つ。なお、ここに取り上げたディドロの論評と『人間論』第二章第十節は、ふたつの作品のなかでも、精彩ある部分に数えられる。双方が繰り広げる弁舌には、哲学的対話や文芸サロンの魅力が漂う。エルヴェシウスの論述についても、ディドロが引用した箇所を読むだけでは足りない。『人間論』の行文を対置し、いわば両者を対話させるならば、ディドロの反駁の面白さも、倍加して感じられる。数頁に及ぶ双方の全文を、訳出する紙幅のないことが残念である。

さて『人間論』まえがきへの第二の論評は、フランスにおける政治の状況に関連する。この箇所は啓蒙君主に対する評価や哲学者たちの姿勢ともかかわり、複雑な問題をはらむ。順を追って考察していこう。

フランスの政情が晩年のエルヴェシウスを憂慮と絶望に沈ませたことは、サン・ランベールによる伝記からも読み取れる。<sup>13)</sup>彼の沈痛な心境は、『人間論』まえがきにおいてとくに濃厚であり、フランスは自力で再生できないとさえ言う。

<資料3>

『人間論』まえがき

わが祖国はついに専制政治の支配に屈服した。今後はフランスから卓越した文筆家は生まれまいであろう。専制政治の本質は精神から思想を、魂から徳性を抹殺することにある。

こうした民族はもはやフランス人として、声価を高めることはできない。この墮落した国民は今日のヨーロッパで軽蔑的である。思い切った手術をしても、自由を取り戻すには至らない。フランスは衰弱して亡びる。これほどの不幸を癒す唯一の妙薬は、外部からの征服にほかならぬ。ただし妙薬の適否は偶然や諸般の状況によって決まる。<sup>14)</sup>

『《人間論》への反駁』まえがき

実際の経験は反対のことを立証する。いま国家の枢要な地位を占める高潔な人達に、せめて十年間だけ留まってほしい。わが国のすべての不幸が、除去されるであろう。

古い司法制度の再建によって、自由な時代への道が拓かれた。

人間の腕と闘うことを、我々はずっと眺めてきた。しかし、人間の腕が疲れても、自然の腕はけっして疲れない。

自然の腕である王国は、盗まれた巨大な鐘に喩えてもよい。愚かな子どもたちが一

団となって綱に絡みつき、鐘の振動を次第に止めたとしよう。だが、晩かれ早かれ力強い腕に取り戻され、ふたたび鐘の音が朗々と響く。

いかなる政治形態においても、自然は人民の不幸に限界を定めている。この限界を超えれば、死滅か逃亡か革命のほかはない。収穫した富の一部は、どうしても農地に返す必要がある。農地を耕作する人と所有する人が生存することこそ肝要であろう。こうした自然の秩序を覆えずことはできない!<sup>15)</sup>

祖国に対するエルヴェシウスの絶望を慰めるかのように、『《人間論》への反駁』は、改革への期待と人民への信頼を語る。引用したなかの数行は、テュルゴの財務長官就任や高等法院の再建と関連するであろう!<sup>16)</sup>ただしこうしたディドロの期待は、絶対主政の内部での改革に幻想を抱いたもの、と批判すべきかもしれない。しかし、巨大な鐘について語る一節は、ディドロの政治理論を把握するうえで、注目すべき叙述である。社会それ自体が再生力をもつこと、苛酷な権力に耐えて、人民はあくまで生き続けることが、婉曲な表現で示唆される。

こうした社会改革への見通しは、両者の政治理論において啓蒙君主への評価と関連する。そして、専制君主の開明政策に対して、エルヴェシウスは期待を寄せ、ディドロは警戒の念を強めた、としばしば説明される!<sup>17)</sup>この問題については多くの研究者が引用する『《人間論》への反駁』第四章第二節をまず検討したい。環境と教育が人間の能力を形成する、という理論を発展させ、政治形態の如何が国民の性格を左右する、とエルヴェシウスは主張する。

#### <資料4>

##### 『人間論』第四章第二節

君主が人民に対して無限の権力を掌握したと仮定しよう。人民の性格が変わり、彼らの魂も気力をそがれ、臆病で卑劣になることは確実である。この瞬間から臣下は名誉を顧みず、労苦に耐え、危険に抗するための勇氣と忍耐を失う。専制的権力の重みによって、競争心という発条が切れてしまう。

誠実な人間の諫言には腹を立て、君主は彼らに反逆者の汚名を被せる。率直であった国民の性格は、偽瞞を好むにいたる。大鼓持ちばかりに囲まれた君主が、危機に際して無能な人間ばかりを見出すならば、だれに責任があるか。自身にほかならぬ。自身が無能な臣下を造ったにすぎない。

奴隷への君臨を切望する狭量な君主もある。専制政治が国民の性格に不吉な変化をもたらすのに、愚かで気付かない君主もいる。隷従から生ずる弊害を考察すると、こうした君主の存在が信じられないほどである。

専制的権力とはなにか。それは災厄の萌芽であり、国家の中枢に芽生え、悲惨と荒廃を实らせつつ伸長する。プロシア国王の言葉を信じよう。「専制的権力ほど望ましいものはない」と彼はベルリン・アカデミーでの演説において語った。「ただし公正で情深く有徳な君主の御代にかぎる。凡庸な国王のもとでは専制的権力ほど忌むべきものはない。」だが、そうした国王がなんと多いことか。ティトゥス、トラヤヌス、アントニウスに似た名君をどれほど思い浮かべうるか。いかにも偉い人の考えそうな言

葉である。こうした言葉は君主政治においても崇高な魂や理性の光が輝やくことを期待する。実際に専制的権力はなにを予告するか。専制君主の破滅はかならず起る。専制的権力を樹立した人物は、王国を終身年金の出所に変えてしまう。人々は生涯にわたり王国から、勝手のいい利得を引き出し、自惚れや怠惰な心や同じような情念に支配されて、みずからの利益を求め。こうして不幸な奴隷に対して不正で残酷な専制政治を敷くことが好まれ、自由で幸福な人民の間に、合法的な権力が行使され敬愛されることを嫌う。専制的権力とは先のみえぬ子どもに等しく、現在のために未来を犠牲にする。<sup>18)</sup>

#### 『《人間論》への反駁』第四章第二節

エルヴェシウスよ。君までがこんな圧制者の箴言を称讃するのか。公正な啓蒙君主が行なう専制政治は、例外なく悪である。彼の徳操がもっとも危険で魅惑的になる。人民は気づかぬ間に啓蒙君主に魅せられて、その世継ぎが邪悪であろうと暗愚であろうと、かならず敬愛し尊重し服従する。こうした君主は考える権利、君主の命ずることが善であっても、みずからの意志で反対する権利が失なわれる。無茶を言うようだが、反対する自由こそやはり神聖な権利である。これらの権利を喪失した臣下は、羊の群が訴えを逸らされ、牧草の豊かな牧場へ導かれる様子に似ている。恣意によって統治する圧制者は最悪の罪を犯す。専制君主の本質はなにか。公正さか、それとも邪悪さか。公正さも邪悪さも、専制君主という定義には含まれてもいない。専制君主か否かは、僭取した権力の用いかたではなく、権力の及ぶ版図によって定まる。公正で寛大で聡明な専制的権力が二代か三代か続く。こうして最大の不幸のひとつが一国に生ずる。人民は幸福に慣れて、自己の権利をすっかり忘れ、完全な奴隷状態に眠り込む。<sup>19)</sup>

専制政治の制度自体を悲惨の根源とみなすディドロの論旨は明快に感じられる。啓蒙君主の高潔な人格や寛大な態度に惑わされてはならず、人民の自覚と批判精神をこそ尊重するがよい。こうした信念の背後には、フリードリッヒ二世との接触から得た切実な体験が潜み、専制的権力への評価はきわめて厳しい。ただしこの節におけるディドロの叙述は、エルヴェシウスの意図と論理に対して、適確な反駁をなしてはいない。実際に『人間論』第四章第二節の文脈を辿ってみよう。ここでエルヴェシウスが力説するのは、啓蒙君主への信頼でも開明的な政策への期待でもなく、専制的権力が無限の災厄を惹き起す事実である。ディドロはフリードリッヒ二世の箴言についても、語句の手直しを伴いつつ、前半の言葉しか引用しないが、むしろエルヴェシウスは箴言の後半に注意を促したと読み取れる。

『人間論』の全巻を見渡しても、啓蒙君主への讃美は稀薄に感じられ、この点に関する従来の評価は修正を要する。人間の精神的素質を平等と考え、政治と国法の改革こそ肝要と説くエルヴェシウスにとって、論理的には開明的な君主を待ち望む理由も、専制政治に固執する必要もない。のちに解明するとおり、究極において『人間論』の著者は、学問の進歩と人民への教育に社会改革の希望を托したといえよう。

にもかかわらず『人間論』まえがきは、啓蒙君主を讃美した数すくない事例に属する。祖国の状況に絶望するエルヴェシウスは、新興勢力というべきプロシヤとロシアに注目し、フリードリッヒ二世やカザリン二世の施政に期待する。この明白で人目を惹く一文にこそ、

ディドロの上記の批判は適切であろう。しかし、プロシヤ国王とロシア女帝を称える『人間論』まえがきの記述に関して、ディドロはなんらの引用も論評も残してはいない。

こうしたディドロの沈黙は、筆者に哲学者たちの置かれた状況の複雑さを痛感させる。エルヴェシウスの叙述のなかで、論評の付されない箇所について、ディドロが賛同したとも無視したとも断ずることはもちろんできない。しかし、この箇所でディドロが筆を差し控えたのは、反駁を後まわしにしたからでも、主張された事柄を軽視したからでもないであろう。むしろ彼みずからが啓蒙君主と親密な関係を結んだためと思われる。

1762年に即位したカザリン二世は、ロシアの近代化を念願し、ヴォルテールやグリムなどフランスの哲学者たちに接近する。ディドロも長女の結婚費用を捻出するため、自己の蔵書をロシア女帝に売却した。さらに女帝は政治的な助言を求め、ディドロをロシアに招請する。こうして彼は1773年10月から翌年3月までサン・ペテルスブルグに滞在し、エルミターージュ宮においてしばしばカザリン二世に謁見した<sup>20)</sup>

ここに筆者が提示するのは帰国の直後に綴られた『ディドロからカザリン二世への書簡』である。この書簡を『人間論』まえがきに並置すれば、啓蒙君主と哲学者たちの関係についてひとつの側面が浮彫にされる。なお、ディドロが再三にわたって『人間論』を精読し、逐条的に論評を記した時期も、ロシア旅行の途中と帰国後の数年と思われる。

<資料5>

『人間論』まえがき

学問とおなじく幸福もまた、地上を旅するといわれる。いまや幸福は北方に向いつつある。そこでは偉大な君主が天才を招き、天才が幸福を呼び寄せる。

今日ではヨーロッパの北方と南方ほど異なるところはない。南方の空は迷信や東洋的専制という濃霧に覆われ、ますます暗鬱となる。北方の空は日毎に輝きを増し、晴朗となる。カザリン二世の一門、フリードリッヒの王家は、人間性の尊重に寄与することを望む。彼らは真理の価値を知り、真理の伝達を奨励し、真理の発見に必要な労苦に敬意を抱く。こうした君主にこそ、私は自分の作品を献呈する。世界を啓蒙するのは、これらの君主であることが望ましい<sup>21)</sup>

『人間論』の冒頭に掲げられたカザリン二世への献辞

至高にして畏れ多く、  
全ロシアの女帝であり、  
学芸の守護者であり、  
自国を統治する才幹とともに  
古き異国について判断する精神にも恵まれた  
カザリン二世陛下に

畏みこみて  
刊行者<sup>22)</sup>

『<人間論>への反駁』まえがき

(論評なし)

ディドロからカザリン二世への書簡

パリにて、1774年10月17日

陛下

無事に家族のもとに帰り、陛下にお手紙を書いております。陛下から宮廷で私が授かりましたすべての御好意に対して、私の父も母も、兄弟も姉妹も、子どもも孫も、友達も知人もひれ伏して感謝いたします。これらの者は私と幸福を共にしており、私と感謝を共にするのも当然であります。自惚れとも思われまじやうが、心底から私はつぎのように感じております。ここに君主の強みがある。君主が有為な人物を引き立てるとき、宮廷の大勢の人々に喜びが拡がるのだ、と。陛下の御才能と御徳操について、私たちは毎夕のようにお噂しております。周囲の者はあらゆる事柄を尋ねます。陛下の御様子のなかで、語り手や聴き手がつまらなく思うことはありません。おなじ事柄が十回も話題にのぼり、説明する私も傾聴する彼らも厭きないのです。

「陛下の御容貌には高貴さが輝いていますか。」「あれほどの高貴さを知りません。」「そのうえ陛下の御様子には優雅さと温和さが溢れている、と君は言うのですね。」「陛下に接した者はだれでも、私とおなじように伝えるでしょう。」「陛下のもとに参内したとき、身震いを感じませんでしたか。」「恥かしいことですが、すこしは身体が震えました。しかし、陛下は御自身の地位も光栄も気にすることなく、私たちを寛ろがせてくれました。」「陛下には芯の強さがありますか。」「自己の精神に目覚めたのは、危機の時代においてである、と陛下がみずから語りました。」「陛下は真理を愛されますか。」「非常に。陛下に真理を明かさない人達は、八裂きにされて当然でしょう。」「陛下には学識がおありですか。」「君たちが家庭の些事に詳しいのに劣らず、陛下は統治なさる帝国、広大なロシアについてよく知っておられます。」(中略)

カザリン二世陛下はもはや軍事的な栄光を示す必要もないので、平和が御治世のかぎり続くようにと祈願いたします。勝利者の名誉を獲得されたあとは、恐怖をもたらすことがすくなく、より永続的で甘美な果実を伴う名誉が陛下にふさわしいでしょう。いかなる時代においても祝福されるもの、それは偉大な立法者という名誉です。すでに陛下は先人シーザーと肩を並べ、危険な隣人フリードリッヒをやや凌駕しました。いまやリクルゴスやソロンの横に席が用意され、やがて陛下はそこに安座されるでしょう。フランス人でもロシア人でもあるこの哲学者は、陛下のために新しい年の幸福をお祈りいたします。

女帝陛下に最高の敬意を捧げつつ

卑賤にして忠実な従僕

ディドロ<sup>23)</sup>

こうして『人間論』のまえがきおよび献辞と、ディドロのカザリン二世あて書簡を並置するとき、これらがきわめて類似した性格をもつことに驚かされる。もちろんディドロの書簡は、恩義を受けた権力者への私信であり、公刊を予定した作品とは異なる。しかし、そこに表現されたロシア女帝への感謝と讃辞を、たんに儀礼的な言葉とみなすことは無理

であろう。

こうした書簡を引用したのは、偉大な唯物論者ディドロの評価を貶しめようと望むからではない。筆者が指摘したいのは、専制政治それ自身が、人民の福祉を圧殺することを洞破したディドロにも、権力への依存と協力が認められる事実である。

ただしカザリン二世との関係に限っても、ディドロの立場と心境は複雑である。彼の大作『ロシア大学案』も女帝の懇請により執筆され、この作品にも権力者への讃辞が含まれる。しかし、ディドロは『立法議員あて女帝陛下の訓令に関する考察』において、帝政ロシアの病弊を忌憚なく批判し、こうした助言がカザリン二世を激怒させるにいたった。<sup>24</sup>ディドロ晩年の苦悩と孤独は、開明君主に対する幻滅に一因を有するであろう。

なお『人間論』まえがきの一文は、いくつかの謎に包まれている。1795年に刊行された『エルヴェシウス全集』で編者ラ・ロッシュは、『人間論』まえがきに含まれる祖国への絶望と啓蒙君主への期待について、特別に註を付した。ラ・ロッシュの説明によれば、これらの箇所は1770年の時点に書かれ、当時における政治情勢の悪化が背景をなす。しかし、こうしたラ・ロッシュの言葉にもかかわらず、『人間論』まえがきには1770年に起った事件を具体的に示す表現は見当たらない。

プロシヤやロシアの権力者を讃美した『人間論』まえがきは、啓蒙君主への期待の稀薄な全巻のなかで特異な部分であり、ラ・ロッシュの註解も奇妙に感じられる。おそらくまえがきの一文は『人間論』刊行の事情およびカザリン二世への献辞と関係が深いであろう。『人間論』を公にすることは、晩年におけるエルヴェシウスの悲願であった。エルヴェシウスの生前にガリチンによる出版の計画があり、背後にロシア女帝からの庇護が存したと推測すれば、『人間論』まえがきについても納得がいく。『人間論』の初版が1769年にドイツ人に渡された草稿に基づき、エルヴェシウスの没後にガリツィンの計画が始まる、という従来の解釈は再考する必要がある。

ラ・ロッシュによる註解もカザリン二世への献辞の取扱いと表裏をなすように思われる。ラ・ロッシュは1795年の『全集』編纂において、初版に載せられたカザリン二世への献辞を削除し、以後は『人間論』の版本や翻訳のほとんどがこの献辞を含まない。ラ・ロッシュは献辞を削除し、『人間論』まえがきを特殊な状況における一文と印象づけることによって、啓蒙君主への幻想を除去しようと望んだのであろう。ガリツィンの出版事業にも参加しながら、ラ・ロッシュが『人間論』初版に強い不満を抱いたのは、エルヴェシウスの遺作がロシア女帝の外交政策に利用されることを嫌ったためとも考えられる。

筆者はこうしたラ・ロッシュの態度に清々しさを覚えるが、エルヴェシウス全集の編纂の方法としては疑問を感じる。啓蒙思想とフランス唯物論が原理的には人民の主権や体制の変革を志向することを認めつつ、開明君主への依存と期待が混在する事実を、ディドロについてもエルヴェシウスについても否定することはできない。

(昭和57年9月1日受理)

エルヴェシウスとディドロの著作の若干に関して、註においては下記の略号を使用する。『人間論』と『《人間論》への反駁』については、現在のところ抄訳しかない。なお、本稿に引用した箇所は、すでに邦訳がある場合も、あらためて筆者自身が訳出した。抄訳の有無と頁数はたんに読者の便宜のため記したにすぎない。

- HH : C.-A. HELVETIUS, *De l'Homme, de ses facultés et de son éducation*, Londres, 1773. 2 volumes.  
HL : C.-A. HELVETIUS, *Oeuvres complètes*, éd. L. La Roche, Paris, 1795. 14 volumes.  
NN : エルヴェシウス著, 根岸国孝訳, 人間論, 明治図書, 1966年。  
DL : R. DIDEROT, *Oeuvres complètes*, éd. R. Lewinter, Paris, 1969-1973. 13 volumes.

註

- 1) E. FRAUENGLER, Diderot et Helvétius. dans *Revue des cours et conférences*, 1937, Volume 38, pp.485-499.  
G. CREIGHTON, Man and Mind in Diderot and Helvétius. in *Publications of the Modern Language Association of America*, 1956, Volume 71, pp.313-329.  
野田又夫, エルヴェシウスとその周囲, (近代精神素描, 筑摩書房, 1947年。所収)
- 2) G. BESSE, Observations sur la réfutation d'Helvétius par Diderot. dans *Diderot Studies*, 1964, Volume 4, pp.29-32.
- 3) G. COMPAYRE, *Histoire critique des doctrines de l'éducation en France*. Paris, 1898. Tome 2, pp.191-204.
- 4) HH, Tome 1, pp.iii-xii, 1-639. Tome 2, pp.1-760.
- 5) DIDEROT, Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé, l'Homme. dans DL, Tome 11, pp.465-653.
- 6) DL, Tome 11, pp.469-470.  
DIDEROT, Réfutation suivie de l'ouvrage d'Helvétius intitulé l'Homme. dans *Oeuvres complètes*, éd. J. Assézat et M. Tourneux, Paris, 1875-1877. Volume 2, pp.276-280.
- 7) J.F. SAINT-LAMBERT, Essai sur la vie et les ouvrages d'Helvétius. dans HL, Tome 1, pp.118-119.
- 8) H. DIECKMANN, *Cinq leçons sur Diderot*, Genève, 1959. p.34.
- 9) HH, Tome 1, p.iii.  
HELVETIUS, De l'Homme. dans HL, Tome 7, p.vii.  
cf. NN, p.11.
- 10) DL, Tome 11, p.465.
- 11) HH, Tome 1, pp.237-239.  
HL, Tome 8, pp.3-6.  
cf. NN, pp.88-90.
- 12) DL, Tome 11, pp.500-504.  
cf. 野沢 協訳, エルヴェシウス『人間論』の反駁〈抜粋〉(小場瀬卓三監修, デイドロ著作集, 白水社, 1980年, 第二巻 pp.304-312)
- 13) SAINT-LAMBERT, op. cit., dans HL, Tome 1, pp.170-172.
- 14) HH, Tome 1, p.ix.  
HL, Tome 7, xiii-xiv.  
cf. NN, p.13.
- 15) DL, Tome 11, pp.465-466.
- 16) 中川久定, デイドロの『セネカ論』, 岩波書店, 1980年。 pp. 350 - 352.
- 17) たとえば,  
小場瀬卓三, デイドロ研究 上, 白水社, 1961年。 p. 300  
D. VERNIERE, Introduction. dans Diderot, *Oeuvres politiques*, Paris, 1963. pp.33-34.
- 18) HH, Tome 1, pp.454-456.  
HL, Tome 8, pp.220-225.
- 19) DL, Tome 11, p.574.

- 20) A. WILSON, *Diderot*, New York, 1973. pp.630–632.
- 21) HH, Tome 1, pp.xi–xii.  
HL, Tome 7, pp.xvi–xvii.  
cf. NN, p.14.
- 22) HH, Tome 1, p.ii.
- 23) DIDEROT, *Correspondance*, éd. G. Roth et J. Varloot, Paris, 1968. Tome 14, pp.118–122.
- 24) 中川久定, 前掲書. pp. 124 - 130.
- 25) HL, Tome 7, p.xiv, xvii.